宇輝人

vol.73

人が、地域がつながる 両仲間 子ども「つどい広場」

1 羽根の向きを調整した牛乳パックのトンボを一緒に飛ばしてみよう　**2** 絵本の読み聞かせに子どもたちは夢中　**3** 12月の餅つきでは近くの介護施設の皆さんも来て子どもたちを応援　**4** 覚えづらい漢字もまず書いて見せる

笑顔が集まる広場

毎月最終日曜日、松橋町の両仲間公民館には、子どもたちの明るい声が響き渡る。子どもたちと地域住民、20人ほどの笑顔が集まるのが、子ども「つどい広場」だ。主催するのは、この地域に住む平野俊昭さん。

平野さんは教職員を退職後、新しい世帯が増える地区で、ゲームや一人遊びばかりの子どもたちの現状を知り、何とかできないかと奮起。異年齢の子どもが集い、活動し、学習を通して地域がつながる機会を作りたいと、地区の文教委員の皆さんと一緒にボランティアでこの広場を創設した。本や文具の購入など両仲間区の協力を得ながら活動を続け、今年で17年目を迎える。

孫を通わせる内田瑞江（みずえ）さんは「普段は甘やかしてしまいがちですが、ここにはお世話してくれるお兄ちゃんやしっかり叱ってくれる先生方もいます。勉強も教えてくれてありがたいです。」と広場の魅力を語る。

平野　俊昭　Hirano Toshiaki

昭和16年下益城郡砥用町（現美里町）出身。松橋町在住。昭和40年教職員となり、天草市や宇城地域で各小学校の教諭、教頭、校長を歴任。平成14年宇土東小学校長を最後に定年退職。平成19年、両仲間区で子ども「つどい広場」を発足させ、地域の中で子どもたちを育む活動を続ける。

集い、活動し、学習する

つどい広場は、まず学習の時間から始まる。元教職員も多い地区の特性からか、みんな子どもとのコミュニケーションはお手の物。家庭では目が届きにくい学校の宿題などもみんなで見守り教える。子どもたちは自発的に楽しく学びを進めていく。

学習が終わると紙芝居や、読み聞かせ、クイズなどさらに目を輝かせる時間へ。夏はハイキングや川遊び、冬は地域のみんなが集まる餅つきなど、楽しいイベントも尽きない。

「ずっと教育に携わってきた者として、何か地域に貢献できることをと思ってきました。公民館は大人だけでなく、子どもたちも使える場所。必ず遊び友だちがいる場として、地域のみんなが公民館に集えるようにしたかったんです。」と平野さんは発足当時の想いを振り返る。

地域で育むこと

退職後、県福祉事務所で子ども相談員となった平野さんは、全国で児童虐待が増える中、子どもの顔が見える場の必要性に気付く。

「『子ども一人を育てるのに、地域みんなの力が必要』というアフリカのことわざがあります。地域全体で子どもを育てていきたいんです。何気ない場所で子どもたちがあいさつしてくれたり、中学生になって『お世話になりました』と家まで言いに来てくれたりして、うれしいことも多いですね。」とつながりを実感することも増えたという。

「広場を続けてこられたのは、両仲間の区長や民生委員、文教委員など皆さんの力添えがあったから。地域の人たちのおかげなんです。」と感謝の想いは強い。

ただ、81歳。徐々に次世代へのバトンタッチも考えている。今年から事務局を引き継いだ本村由紀博（ゆきひろ）さんは「平野先生だから人が集まってくるんです。今は、修業の期間。先輩たちの想いを私たちもしっかりつなげていきたい。」と話す。

それでも住民の代表として、関わりはやめない。人のつながりを大切にする子どもを、地域の中で育んでいくために。